

巻頭言「地域包括ケア病棟」	1
第9回鳥取県がんフォーラム開催報告 3月6日(日)開催「多職種で支える緩和ケア」	2-3
消化器内科、中央放射線室からのお知らせ	4
がん治療の前に、歯科受診をお勧めしています	4
私たちは、医師をサポートする医師事務作業補助者(MA)です！	5
災害訓練を実施しました	5
新任部長からごあいさつ	6
看護師・看護助手のユニフォームが新しくなりました！	7
新任医師、退職者の紹介	7-8

巻頭言

地域包括ケア病棟

2025年には団塊の世代が後期高齢者となり、2200万人、5人に1人が75歳以上という超高齢化社会が到来します。このため、国は2014年に「医療介護総合促進法」を施行し、地域における新たな医療構想の設定と実施を求めています。具体的には「病院完結型」から「地域完結型」への変換であり、継続的な在宅医療・介護の提供を行う「地域包括ケアシステム」の構築です。

地域の病院には病院機能の分化を求めています。要は、病院の特徴を明確にすることです。県立厚生病院は公的病院として急性期の患者さんの診断・治療を担当します。

さて、現在の医療は病名と重症度により、入院期間や医療費が決められており、在院日数の短縮が図られています。非常に細かい規則なので、詳述は避けませんが、国が示した入院期間を超えた患者さんを、強制的に退院していただくことは、県立病院としてできません。自宅に近い病院に転院できない場合、そもそも帰宅したくても世話をする家族がいない、入院していたほうが安心である、そうした患者さんが本院では毎日、30人前後、長期入院されています。

国は急性期から受け入れ・在宅支援を目的とした地域包括ケア病床を新設して、在宅復帰支援

の必要な患者さんが60日までと比較的長い入院を可能としました。リハビリも充実しています。

全国的には平成27年4月現在、14.5%の病院で「地域包括ケア病床」を導入しており、今後も増加することが予測されています。因みに、鳥取県は11病院(24.4%)で導入されており、全国第3位です。

「地域包括ケア病床」に入院されている患者さんの病名を全国的に調査してみると、骨折・外傷、肺炎、脳梗塞が上位三疾患です。

軽度な急性疾患、がん緩和ケアあるいは新規の患者さんや短期入院を目的とした患者さんも地域包括ケア病棟に入院出来ますが、当院としては、主として急性期の治療が一段落した本院の入院患者さんに、利用していただけるよう運用します。

国のスローガンである「時々入院、ほぼ在宅」と急性期医療の展開を中部医療圏で両立するための「地域包括ケア病棟(43床)」です。

一部患者さんには、転病棟などでご迷惑をおかけしますが、制度の趣旨をご理解いただき、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

院長 井藤 久雄

第9回鳥取県がんフォーラム開催報告

3月6日（日）開催 「多職種で支える緩和ケア」

鳥取県のがん医療機関の連携を推進し、がん治療技術や知識のさらなる向上を図るために、最新の医療に関する講演会と地域医療機関におけるがん治療の研修会を開催しました。

多数の聴衆があり、有意義なフォーラムとなりました。

中央手術センター長 吹野俊介

第一部

「全人的苦痛を緩和するチームアプローチ

～それぞれの職種の役割、取り組みについて～

○鳥取大学医学部附属病院

がんセンター緩和ケア科 吉本美和助教

－当院で取り組んでいる

新しい腹水治療・KM-CART－

この治療の特記すべき点は、貯留している腹水の全量ドレナージが可能となることです。

緩和医療としての効果が期待されます。

○鳥取県立中央病院 薬剤部

竹内裕恵緩和薬物療法認定薬剤師

－緩和ケアにおける薬剤師の役割－

薬剤師はただ服薬指導を行うだけでなく、薬剤師の視点から緩和ケアの提供、患者さんのQOL（自分らしい生活）に寄与できるよう努力が必要だと思います。

患者さんとそのご家族の不安や疑問を解消していく手助けをします。

○鳥取県立厚生病院 リハビリテーション室 竹内瑞貴理学療法士

－がんのリハビリテーション

～選択肢を増やす一手段として～

リハビリテーションとは単なる機能回復ではなく、「自分らしく生きる権利の回復」や「自分らしく生きること」が重要です。

患者様自身が目標を選択できること、選択肢をたくさん示せることが大切なのではないでしょうか。

○米子医療センター 栄養管理室

藤原朝子室長

－緩和ケアにおける食事対応について－

米子医療センターでは栄養士を病棟担当制とし、患者状態を把握している看護師、医師と連携を密にし、情報を共有して食欲不振の原因や程度を評価しています。少しでも食べやすい食事の提供ができるように努めています。



○鳥取県立中央病院 がん相談支援センター

池田牧がん看護専門看護師

ー緩和ケアリンクナースによる

がん患者への苦痛スクリーニングー

リンクとはつなぐという意味です。現場で起きている問題を吸い上げ、専門家につながるのがリンクナースの役割です。

患者様の不安の軽減に取り組んでいます。

○鳥取県立厚生病院 がん相談支援センター

阿部桂臨床心理士

ーがん患者・家族が抱える

不安症状に対する取り組みー

看護ケア、リハビリでの関わりの中で患者さんや家族から受け取ったメッセージを多職種で共有することで、それぞれの専門性をいかしたアプローチができるのではないのでしょうか。

○鳥取市立病院 地域医療総合支援センター

山根綾香緩和ケア認定看護師

ーがんと仕事ー

がんになったからといって、仕事を辞める必要はありません。社会とのつながりを持ち続けることで、病気と向き合う力が生まれることもあります。

○鳥取県立中央病院 緩和ケア科

浦川賢部長

ー多職種でのチーム医療～その功罪～

現代の医療現場では、ひとりの専門家がすべてに対応することは不可能となっており、チーム医療で成り立っています。

いろいろなチームが情報を共有し合い、多職種での本当のチーム医療ができるよう一緒に考えていきましょう。



第二部 特別講演

「がんサバイバーシップ

～その人の力をたかめるかかわりとチーム医療～」

北里大学病院 集学的がん診療センター

近藤まゆみがん看護専門看護師

医療の進歩に伴い、がんを抱えながら社会生活を送る人「がんサバイバー」が年々増加しています。この人々がどう自分らしく生きていくのか、ということに関心が向けられてきています。そこでの医療の役割は、その人らしい「がんサバイバーシップ」を少しでも高められるように関わっていくことにあります。

がんを体験した人々が、元来持っている「自らの力」を取り戻し、新たな自分の人生を歩むことができるように寄り添い、サポートしていくための緩和ケアをともに考えていきましょう。

次回健康公開講座のご案内

日時:6月12日(日) 13時30分～16時

テーマ:肺がんから生命を守る
いのち

会場:倉吉未来中心 セミナールーム3

入場は無料です。

消化器内科、中央放射線室からのお知らせ

平成28年6月から稼働がはじまりますCTコロノグラフィーについてご紹介します。

大腸がんは身近な病気です。日本人は生涯で大腸がんになる確率は男性で12人に1人、女性で15人に1人とされています。

大腸の詳しい検査は通常、大腸内視鏡やX線を使った注腸検査ですが、既存のCT装置を使って大腸の検査が行えるようになりました。

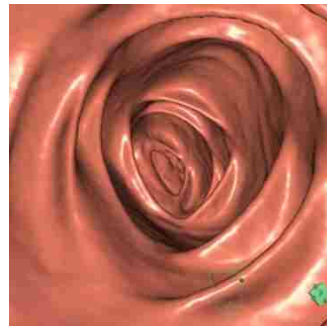
CTコロノグラフィーとは大腸の検査方法ですが、内視鏡を挿入することなく、既存のCT装置と炭酸ガス送気装置を使って行う大腸の検査です。内視鏡のように直接大腸を観察するものではないので内視鏡検査にとってかわるものではありませんが、何らかの理由で大腸の内視鏡検査が困難な患者さんにとって朗報と言えます。

CTコロノグラフィーでポリープやがんなどの隆起性病変を見つける精度は6mm以上だと88%、10mm以上だと99%とされ、大腸の検査

方法の選択肢がひとつ増えたと考えられます。

大腸CTの画像

マルチスライスCT装置で撮影した画像から、仮想内視鏡像や注腸様画像を作成し、診断します。



〔仮想内視鏡像〕



〔注腸様像〕

詳しくは、当院、消化器内科または中央放射線室まで。

消化器内科部長 野口直哉

がん治療の前に、歯科受診お勧めしています

当院では、平成27年8月から、がん治療(手術・化学療法・放射線治療)の前に合併症予防を目的に、歯科診療所と連携して歯科受診をおこなっております。平成28年3月末までの8か月間で、約100件の連携をしました。

がんの治療を行う前に、口腔内(口の中)をきれいしておくことは、治療を順調に進めるうえで大変重要です。通常は悪さをしない口腔内の細菌も、がんの治療中に大きなトラブルを引き起こすことがあります。化学療法・口腔周辺の放射線療法では、口内炎や、感染症の

副作用を起こしやすくなります。また、手術後には、合併症として肺炎を起こすリスクがあります。そこで、治療の前に歯科受診をすることで副作用や合併症を予防することができます。

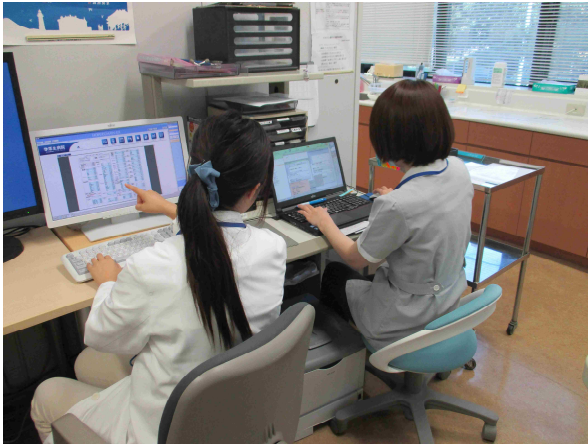
当院には歯科がありませんので、地域の歯科診療所と連携し、よりよいがん治療に取り組んでいます。今後も地域の歯科診療所と連携し、医療の質を上げていきたいと考えています。

地域連携センター副センター長 船越智美

私たちは、医師をサポートする医師事務作業補助者（MA）です！

医師事務作業補助者(MA)は平成20年4月から配置され、現在13名が医師の指示の元に業務を行っています。

医師は、医療行為だけでなく様々な業務を



行っており、そんな医師の負担を軽減するために医師事務作業補助者(MA)の仕事があります。例えば、医師のかわりに電子カルテの記載をすることで診察がスムーズに進み、患者さんの待ち時間が短縮できます。

また、医師は何百件もの診断書等の文書作成依頼があります。文書作成を代行することで医師が書類作成にかかっていた時間が減り、書類を早く患者さんに渡すことができるようになります。サービス向上に繋がります。

これからも患者さんと医師、そして病院のサービス向上のため頑張りますのでよろしくお願いします。

災害訓練を実施しました

当院は中部医療圏の災害拠点病院であり、DMAT(災害時派遣医療チーム)を有していることから、県内外で大規模災害等が発生した際は傷病者の受入れや被災地等への職員派遣を行うことになっています。

こうした事態に備えるため、昨年11月14日、県下で大規模地震が発生し多数の傷病者が搬送されるとの想定のもとに災害訓練を実施しました。

消防局や倉吉総合看護専門学校に協力をいただき、学生の演じる模擬患者に対し救急車搬送、トリアージ(重症度により治療の優先度を決定して選別を行うこと。)並びに傷病の状況に合わせた模擬処置を行いました。

この訓練を通して様々な問題点が浮き彫りになりましたが、災害時医療に対する各職員の意識高揚につながり、非常に有意義な訓練となりました。

管財課長 藤内郁

〔救急搬送患者を受入れ、トリアージを実施〕



〔災害対策本部〕



新任部長からごあいさつ

疼痛緩和診療科 部長 堀 真也



4月1日付けで疼痛緩和診療科部長を拝命しました。

新たな診療科を立ち上げることとなり身の引き締まる思いでおります。本来痛みは人の体の問題のある(障害のある)ところを「痛み」という合図で私たちに教えてくれるためのものです。ところが強すぎる痛みや意味のない痛み(神経痛等)は私たちの日常生活の妨げとなります。そこで種々の注射やお薬、鍼治療、光線治療等を組み合わせて痛みを和らげ日常生活が普通に送れるよう支援するのが私の役割です。

近日中に外来診療を開始する予定です。よろしくお願いいたします。

リハビリテーション室 室長 松岡 哲史



このたび、リハビリテーション室長を拝命しました。

リハビリテーション室の業務は運動器、脳血管、呼吸器、がんリハビリテーションなど、多岐にわたっています。その対象年齢も新生児から高齢者まで幅が広く、疾患・症状もさまざまです。

リハビリテーション室は理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の三職種が、それぞれ対象となる患者様を責任持ってリハビリし、QOL(生活の質)、ADL(日常生活動作)の維持・向上を目指し、満足度の高いリハ実施のため、日々がんばっています。包括ケア病棟が開始される今年度はさらに業務連携を確認し、リハビリを実施していく必要があります。

今後さらに業務向上のため、訓練のみならず、精神的サポート、家族支援など幅広いリハビリを実施できるように努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

事務局 局長 足立 正久



4月1日付けで事務局長を拝命しました。

厚生病院は県の基幹病院、中部地域の中核病院としてその果たすべき役割は大きく、期待も高いところです。

国全体として、いわゆる団塊の世代が75歳を迎える2025年を展望した医療・介護サービスの提供体制の改革が行われつつありますが、厚生病院の掲げる基本理念に基づきその使命が果たせるよう、職員の皆さんと一緒に取り組んでまいりたいと考えております。よろしくお願いいたします。

看護師・看護助手のユニフォームが新しくなりました！

4月から看護師のユニフォームがブルーからホワイトへ、そしてデザインも変更になりました。従来の購入方式からリース方式に代えることに伴い、看護師・看護助手のユニフォームを一新したものです。

病院での在庫管理が不要になること、育児休業職員の職務復帰の際にも効率良く管理ができることがメリットとしてあげられます。

今回のデザイン決定の際には職員による総選挙を行いました。看護師以外の職員も参加し、着る側だけでなく、見る側の視点での評価もいただきました。

真っ白なユニフォームで、気持ちを新たにし

てより良い看護が提供できるよう取り組んでいきたいと思ひます。

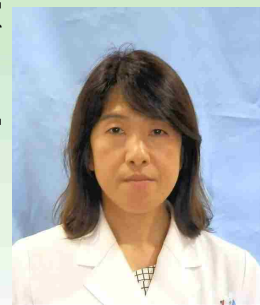


看護局 小椋美保子

新任医師紹介（平成28年4月1日採用）

消化器外科

いわもと あけみ
岩本 明美（医長）



「ひとこと」
二年ぶりに厚生病院に帰ってきました。中部地区の皆さんに、標準的な医療を安全に提供できるよう、努力して参ります。何かございましたら気軽に申し上げます。よろしくお願ひ申し上げます。

脳神経内科

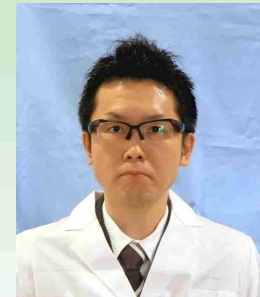
なかした さとこ
中下 聡子（医長）



「ひとこと」
四月から厚生病院に赴任しました。名古屋で初期、後期研修後に鳥取大学医学部附属病院で神経内科を中心に診療しておりました。早く環境に慣れて皆様のお役に立てるように頑張りますので、よろしくお願ひいたします。

消化器外科

みやたに こうぞう
宮谷 幸造（副医長）



「ひとこと」
この春から消化器外科で勤務させていただきます。医師として未熟な小生でございますが、少しでも地域の皆様のお役に立てるよう、精進いたします。ご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

外科

まつおか ゆうき
松岡 佑樹（副医長）



「ひとこと」
この春から厚生病院でお世話になります。出身は熊本県で、鳥大卒業後十年目になります。趣味はフットサル、スノーボード、ロック（音楽）です。早く環境に慣れてお役に立てるよう頑張りたいと思ひますので宜しくお願ひいたします。

新任医師紹介（平成28年4月1日採用）

消化器内科

はせがわ りょうすけ
長谷川 亮介（医師）



〔ひとこと〕
四月から厚生病院に勤務することになりました。それまでは島根県浜田市の病院に勤めていました。倉吉市も浜田市ともに山陰ですが、気風は大きく異なるように感じる今日この頃です。新しい土地で心機一転頑張りたいと思いますのでよろしくお願ひします。

産婦人科

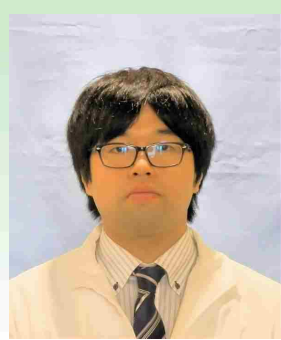
もりやま まあこ
森山 真亜子（専攻医）



〔ひとこと〕
今春より厚生病院で勤務することになりました。アットホームな雰囲気です。居心地の良さを感じています。まだまだ未熟者ですが、少しでもお役に立てるよう精進いたします。よろしくお願ひ申し上げます。

外科

おおしま ゆうき
大島 祐貴（専攻医）



〔ひとこと〕
四月より外科専攻医として勤務することとなりました。赴任後しばらくは消化器外科での研修をさせていただく予定となっております。少しでも皆様のお役に立てるよう努力していきますので、何卒よろしくお願ひいたします。

消化器内科

とりかい ゆうすけ
鳥飼 勇介（専攻医）



〔ひとこと〕
四月から厚生病院で勤務させていただきます。倉吉市出身であり山陰の雰囲気になつかしく感じます。まだまだ医師として未熟ですが、せいいつぱいがんばりたいと思います。よろしくお願ひいたします。

研修医

たけなみ ともひこ
武浪 知彦



〔ひとこと〕
四月から鳥取県立厚生病院で研修させていただきました。知識や技術を習得するだけでなく、患者に寄り添える医師になりたいと思っています。研修を始めるにあたり、喜びや期待、そして同時に不安もあり、未熟さを痛感させられる時もあると思いますが、少しでも鳥取県の医療に貢献できるよう、素晴らしい研修環境に感謝しつつ、学びの多い充実した一年間を送り、日々成長できるように頑張っていきたいと思っております。よろしくお願ひします。

退職者（三月末付） 医師

- 脳神経内科 土井 浩二
- 消化器外科 三宅 孝典
- 消化器外科 谷尾 彬光
- 消化器内科 斧山 巧
- 消化器内科 木下 英人
- 外科 大野 貴志
- 産婦人科 村上 二郎
- 長期勤続退職者
- リハビリテーション室 福井 健一
- 事務局 飯田 綾子

お世話になりました



編集 鳥取県立厚生病院 院内広報委員会
発行 鳥取県立厚生病院
〒682-0804 鳥取県倉吉市東昭和町150番地
電話 0858-22-8181(代) ファクシミリ 0858-22-1350

厚生病院のホームページも、ぜひご利用ください。
パソコン、スマートフォンからご覧いただけます。
<http://www.pref.tottori.lg.jp/kouseibyouin/>

